

かわらず、左右対称性、運動性に対する満足度および全体の満足度は非常に高かった。また、調査した合併症の程度は、ほとんど術後2年以内に固定するものと考えられた。

4) ヘリカル CT を用いた乳房温存手術のシミュレーション

牧野 春彦・佐野 宗明 (県立がんセンター)
 植松 孝悦 (同 放射線科)
 本間 慶一 (同 病理)

乳房温存療法は近年、我が国でも乳癌に対する標準治療の1つとして定着しつつある。しかし、一方で手術時の切除断端陽性は局所再発の危険因子であり、乳房温存の時代に画像診断に求められる診断特性は良悪性の質的診断ではなく、むしろ癌の診断がついた症例の病巣の広がり、すなわち量的診断である。今回当科で乳房温存手術が施行された130例を対象としてCTを用いた温存手術のシミュレーション導入前の34例と導入後の96例に分けて断端陽性率を比較検討した。【結果】断端陽性率はシミュレーション導入前：7/34=20.6%，導入後：12/96=12.5%であり、著明に減少した。またCTにて腫瘍外進展を認めた症例ではシミュレーションをもとにCT-guided surgeryが可能であった。【結語】ヘリカルCTを用いた乳房温存手術のシミュレーションを術前に施行することにより手術時の断端陽性率を減少させ、個々の症例に適した切除範囲を設定することが可能であった。

5) 乳癌における Fatty Acid Synthase (FAS) の免疫組織学的検討

阿部 伸子・清野 俊秀
 刈部 豊・渋谷 宏行 (新潟市民病院)
 岡崎 悦夫 (臨床病理部)
 藍沢 修 (同 外科)

Fatty Acid Synthase (以下 FAS) は生物界に広く存在する脂肪酸合成酵素で、ヒトでは非増殖状態の脳、肺、肝、皮脂腺、乳腺に存在する。最近、癌組織での過剰産生が報告され、一部の癌でその発現量が予後と逆相関するという報告もある。今回、乳癌手術例(250例)のホルマリン固定パラフィン切片を用い、ABC法で抗FASポリクロナール抗体(IGL)の免疫染色を行い、

その発現が有効な予後因子となりうるかを検討した。

FASは142例(56.8%)の乳癌で陽性。陽性例のうち術後5年経過した88例に限ってみると41例(46.6%)が術後5年未満で再発した。陰性例での再発は1例のみ(0.9%)であった。陽性の場合、再発の可能性が高い(カイ二乗検定 $p < 0.0001$)。

年齢、組織型、腫瘍の深達度、手術時の病期とFAS陽性の間に明らかな関連はなかった。FAS陽性群の再発と非再発に関係する因子の系統的な解明が望まれる。

6) 乳癌肝転移切除例の検討

土屋 嘉昭・佐野 宗明
 牧野 春彦・佐々木壽英
 田中 乙雄・梨本 篤 (県立がんセンター)
 筒井 光廣・藪崎 裕 (外科)
 本間 慶一 (同 病理)

乳癌の肝転移は予後のlimiting factorとなることから積極的な治療が必要である。1984年より1998年2月までに切除された肝転移症例は17例、全例女性が年齢は23~77歳(平均47.5歳)、同時性2例・異時性15例であった。これらの症例につき臨床病理学的所見を検討した。術式は部分切除1例・亜区域切除1例・区域切除5例・肝葉切除10例であった。累積生存率1年64%・2年29%で最長生存は5年、肝無再発生存であった。異時性15例中11例に肝転移診断時に多臓器への再発が認められていたが、この多臓器への再発の有無は肝切除後の生存率への影響は認められなかった。また検索された12例中8例(67%)に肝十二指腸間膜リンパ節に、10例中7例(70%)に傍大動脈周囲リンパ節に組織学的転移が認められた。乳癌の肝転移症例は切除可能例においても診断時すでに多臓器への再発が見られる症例が多く、肝切除も広範囲の肝切除が必要であったが長期生存例も得られた。

主題 乳癌の化学療法について

1) 進行乳癌に対する自己造血幹細胞移植併用大量化学療法

今井 洋介・張 高明 (県立がんセンター)
 石黒 卓朗 (新潟病院内科)
 牧野 春彦・佐野 宗明 (同 外科)

手術時腋窩リンパ節転移が10個以上の乳癌は再発率が高く、長期予後も不良であるため通常、術後化学療法が